

黙示録9章12-21節 「地獄からの騎兵」

1A なお二つの災い 12

2A 大河ユーフラテスに繋がれた天使 13-15

3A 火と硫黄の出る騎兵 16-19

4A 生き残ったのに、悔い改めない者たち 20-21

本文

黙示録9章を開いてください。私たちは、前回9章の前半を読みました。今晚は、後半部分を見ていきます。12-21節です。(まず、本文全部を読む)

子羊が第七の封印を解き、そこから七人の御使いが出て来て、それぞれがラッパを吹き鳴らします。その最後の三つのラッパが、その災いが今まで以上に厳しくなるので、三つの災いと呼ばれています。そしてその第一の災いを私たちは前回見ました。底知れぬ所の鍵が開かれて、そこから、尾にサソリの毒のある、いなごのような群れが出てきます。それは、まさに悪霊どもであり、五か月の間、人々を苦しめたのです。死にたくても死ねない苦しみです。

そして今、読んだところも、同じように、悪霊どもによる災いです。ここでは、騎兵の姿をもって現れ、なんと人間の三分の一を殺してしまいます。私たちは、これまでの戦争でも、大軍が押し寄せて、その国の人々のかなりの割合で殺していくという恐ろしい歴史、記憶を持っています。しかし、終わりの日、患難の時には、これまでにない恐ろしい形での殺戮が行われるということです。

1A なお二つの災い 12

¹² 第一のわざわいは過ぎ去った。見よ、この後、なお二つのわざわいが来る。

底知れぬところからの、いなごの災いが過ぎ去りました。これだけでも、もう金輪際、受けたくないという思いが出てくるはずですが。しかし、「見よ、この後、なお二つのわざわいが来る。」と、なおのこと二つの災いが下るのです。地上に残されている者たちに対して、これでもか！というばかりに災いが下ります。

2A 大河ユーフラテスに繋がれた天使 13-15

¹³ 第六の御使いがラッパを吹いた。すると、神の御前にある金の祭壇の四本の角から、一つの声が聞こえた。

第六のラッパです。ここでは、金の香壇から声がしています。ラッパが吹き鳴らされる前に、御

使いが、香壇の火を地に投げつけたことを思い出してください。その同じ香壇の、四隅の角から声が聞こえました。祭壇の四隅は、角の形をしています。雄羊や雄牛の角を指していて、力や救いを表しています。8章では、香壇からの煙は、聖徒たちの祈りが込められた災いと言えます。殉教した聖徒たちが、神が不正や悪に対して、正しい裁きを行われぬのですか？という祈りと願いに、主が答えられているのです。

¹⁴ その声は、ラツパを持っている第六の御使いに言った。「大河ユーフラテスのほとりにつながれている、四人の御使いを解き放て。」

第五のわざわいは、底知れぬ所からの悪霊ですが、第六は、大河ユーフラテスにいる、墮落した御使いからのものです。「大河ユーフラテス」は、聖書の中でとても大事な霊的意味を持っています。創世記の天地創造の話を出せませんか、エデンの園には四つの川が流れていて、その一つがユーフラテス川でした。けれども、そこに悪魔がいて、蛇が女をだまして、禁じられた実を食べさせました。そして、ユーラテス川河畔地域、シナルの地で、ノアの子孫が一つに集まり、そこに天に届く、自分たちの名のための塔を建てようとした。バベルの塔です。それからというもの、その地域バビロンは、偽りの宗教の発祥地となったのです。

イザヤ書 14 章には、明けの明星、ラテン語でルシファーに対する預言があります。それは、いと高き方のようになるとして墮落した天使、サタンの姿があります。けれども、イザヤ書 14 章は、バビロンの王に対する預言でした。バビロンの王に対する主のことばが語られている中で、その背後にいるサタンを語っているのです。このように、バビロンには悪魔と悪霊の存在があります。黙示録を読み進めると、16 章で、ハルマゲドンに集まるために、日出ずるところからの軍勢が、涸れたユーフラテス川を渡河することが書かれています。竜の口と、獣の口と、にせ預言者の口とから、かえるような汚れた霊どもが三つ出て来る、と書いてあります。悪霊がその地域から出てきます。そして、17-18 章には、「17:5 大バビロン、淫婦たちと地上の忌まわしいものの母」という、大きな都が出てきます。そこで御使いが叫びました。「18:2 倒れた。大バビロンは倒れた。それは、悪霊の住みか、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた鳥の巣窟、あらゆる汚れた憎むべき獣の巣窟となった。」悪霊の住処、あらゆる汚れた霊の巣窟となっているのです。

ですから、ここでは「四人の御使い」は墮天使でありましょう。7 章では、地に海に、木に害を加えないように地の四方の風を押さえていた四人の御使いが出ていますが、ここでは墮落した四人の使いがそこに閉じ込められていたということになります。そして大事なのは再び、これを支配しているのは、神ご自身だということです。「解き放て」と神が命令しておられます。いなごの災いの時も、底知れぬ所の鍵を開けたサタンは、「鍵が与えられた(9:1)」のであって、主なる神があくまでも、それをお許しになって開けたのです。悪魔と悪霊どもが、地上にいる者たちに対して地獄の苦しみをもちて苦しめるのですが、それはあくまでも、神の主権の下で、裁かれる手段として許可し

ておられます。

¹⁵ すると、その時、その日、その月、その年のために用意されていた、四人の御使いが解き放たれた。人間の三分の一を殺すためであった。

驚くことに、いつからそこに押さえられていたのでしょうか、四人の使いは、「その時、その日、その月、その年のために用意されていた」とあります。神の永遠のご計画の中で、この時のために定められていた、閉じ込められていたということです。それだけ、神は永遠のご計画の中で、用意をされる方です。永遠の御国を、なんと世界の基を置かれる前から用意されています。「マタ 25:34b 世界の基が据えられたときから、あなたがたのために備えられていた御国を受け継ぎなさい。」それだけでなく、神の裁きについても予め用意しておられます。「マタ 25:41 それから、王は左にいる者たちにも言います。『のろわれた者ども。わたしから離れ、悪魔とその使いのために用意された永遠の火に入れ。』初めから人の墮落を知っておられて、裁かなければいけないことを知っておられて、そしてその時の具体的な計画を持っておられるということです。

そして、死んでいく人間は、なんと「三分の一」です。ラツパの裁きにおいて、初めの四つは、三分の一が被害を受ける災いでした。地の三分の一が焼かれました。海の三分の一が血になりました。川の三分の一とその源の水が苦くなりました。そして、太陽、月、星の三分の一が暗くなりました。このようにして三分の一が損なわれましたが、人の命も三分の一が損なわれます。

3A 火と硫黄の出る騎兵 16-19

¹⁶ 騎兵の数は二億で、私はその数を耳にした。

ヨハネは数を聞きました。驚くべき人数です。「二億」とあります。ギリシヤ語では、もっと強調されていて、「一万かける一万かける2」というように書かれています。それで二億です。そして、「私はその数を耳にした。」とヨハネは、聞いたとおりをそのまま証言していますから、実際にそれだけの人数がやってきます。これは象徴的な表現だとすることのできない、客観的に数字です。

当時、ローマ軍団がいて、レギオンと呼ばれます。そうです、悪霊の名前は、ローマ軍団から来ています。一つの軍団は 5 千人から 6 千人と言われます。25 のレギオンがいたので、多くて 15 万もの軍団兵です。全く、2 億人には及びません。そして、ローマを何世紀にも渡って東方から脅かしていたパルティア人(Parthians)がいました。イラン発祥の国です。彼らは騎兵による戦いで有名です。ですから、東方からの騎兵、大河ユーフラテスから騎兵としたら、当時、この啓示の朗読を聞いていた人々は、パルティア人を思い出したかもしれません。けれども、それでも、2 億人という数字は尋常ではありません。当時の世界の総人口よりも多い人数なのですから！

17 私が幻の中で見た馬と、それに乗っている者たちの様子はこうであった。彼らは、燃えるような赤と紫と硫黄の色の胸当てを着けており、馬の頭は獅子の頭のように、口からは火と煙と硫黄が出ていた。18 これら三つの災害、すなわち、彼らの口から出る火と煙と硫黄によって、人間の三分の一が殺された。19 馬の力は口と尾にあって、その尾は蛇に似て頭を持ち、その頭で害を加えるのである。

この騎兵が、悪霊どもの現れであることは明白です。胸当てをつけていますが、燃えるような赤、紫、硫黄の色であり、まさに火と硫黄の池と同じ、地獄の色であります。馬の頭が獅子の頭のようになっていますが、獅子は動物界の王者とも呼べる存在です。そして特徴的なのは、火と煙と硫黄が口から出てきていることです。これもまた、地獄の火が口から出てきていると言えるでしょう。ですから、地獄の火で殺されていると言ってよいでしょう。おまけに、どこで人に害を加えるかと言えば、尾が蛇の頭になっていて、それで危害を加えます。蛇と言えば、エバを感わしたあの蛇を思い出します。サタンのもたらす苦しみです。

この啓示は、ヨハネが新たに受けたものではありませんでした。ヨエルが主の日は、こうなるのだと神に言われたことであります。2章を読んでみましょう。

1 「シオンで角笛を吹き鳴らし、わたしの聖なる山でときの声をあげよ。」地に住むすべての者は、恐れおののけ。【主】の日が来るからだ。その日は近い。2 それは闇と暗闇の日。雲と暗黒の日。数が多く、力の強い民が、暁とともに山々の上に進んで来る。このようなことは、昔から起こったことがなく、これから後、代々の時代までも再び起こることはない。3 彼らの前は火が焼き尽くし、うしろは炎がなめ尽くす。彼らが来る前は、この地はエデンの園のよう。しかし、去った後は、荒れ果てた荒野となる。これから逃れるものは何もない。4 その姿は馬さながら、軍馬のように駆け巡る。5 その音は戦車のきしり、山々の頂を飛び跳ねる。その音は刈り株を焼き尽くす火の炎、戦いの備えをした強い民のよう。6 諸国の民はその前でもだえ苦しみ、顔はみな青ざめる。7 それは勇士のように走り、戦士のように城壁をよじ登る。それぞれ自分の道を進み、進路を乱さない。8 互いに押し合わず、それぞれ自分の大路を進む。投げ槍が降りかかっても、止まらない。9 町に襲いかかり、城壁の上を走り、家々によじ登り、盗人のように窓から入り込む。10 地はその前で震え、天も揺れる。太陽も月も暗くなり、星もその輝きを失う。11 【主】はご自分の軍隊の先頭に立って声をあげられる。その陣営は非常に大きく、主のことばを行う者は強い。【主】の日は偉大で、非常に恐ろしい。だれがこの日に耐えられるだろう。

前回、いなごの災いが、ヨエル書に預言されていることを話しましたが、それは1章に書かれています。ヨエルの預言は、いなごのような悪霊の災いと、騎兵の災いの二つを連続して預言していることが分かります。そしてそれが、主の日、患難の時の災いなのです。

4A 生き残ったのに、悔い改めない者たち 20-21

このように、あまりにもおぞましい災い、ホラー映画以上に恐怖に満ちた災いが襲いますが、9章は、それ以上に恐ろしいこと、衝撃的なことを描いています。それは、人の頑なな心です。今、読んだヨエル書の箇所続きには、こうあります。「2:12 **しかし、今でも——【主】のことば——心のすべてをもって、断食と涙と嘆きをもって、わたしのもとに帰れ。**」わたしのもとに帰れ、と言っています。けれども、応答しない人々の姿の啓示を、ヨハネは受けます。

²⁰ これらの災害によって殺されなかった、人間の残りの者たちは、悔い改めて自分たちの手で造った物から離れるということをせず、悪霊どもや、金、銀、銅、石、木で造られた偶像、すなわち見ることも聞くことも歩くこともできないものを、拝み続けた。²¹ また彼らは、自分たちが行っている殺人、魔術、淫らな行いや盗みを悔い改めなかった。

前回話しましたように、当時のローマ社会には、偶像礼拝と魔術、淫らな行いが混じり合った異教が社会に浸透していました。その背後には悪霊がいます。しかし、その悪霊によって、彼ら自身が悪霊によって苦しめられるのですから、大きな皮肉です。自分たちの仕えている悪霊が、彼らを五カ月の間、死にたいほど苦しいのに死ねない苦しみを与え、ここでは、人類の三分の一が死ぬほどの恐ろしい軍隊として、彼らを襲います。

聖書は、何度となく、自分を造られた方をあがめるのではなく、自分の手で造った物をあがめることの愚かさを教えています。イザヤ書 44 章 9 節から 20 節を後でじっくり読んでみてください。木を細工する者の姿が出てきます。木の半分を使って偶像を造り、それをおがみますが、その半分以上を薪にして、食べ物や温める燃料にしています。そして、これらの偶像が生きていないことを、見ることができない、聞くこともできないとして、その空しい姿を詩篇の著者が描いています。「135:15-18 異邦の民の偶像は銀や金。人の手のわざにすぎない。16 口があっても語れず目があっても見えない。17 耳があっても聞こえずまたその口には息がない。18 これを造る者もこれに信頼する者もみなこれと同じ。」

そして、偶像そのものは神ではなく、単なる木や石で造られたものでありますが、人々がそれに仕えていることによって、神ではないものに仕えるという制度の中に悪霊が働きます。パウロは、「1コリント 10:20 むしろ、彼らが献げる物は、神にはではなくて悪霊に献げられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。」ですから、私たちが、単に儀式や作法だけなのだから参加してよいのだとしたら、むしろそこで霊的な混乱を自分の身に招くことは覚えておいてください。

そして、「魔術」とありますが、これは薬とも訳すことのできる言葉です。有害なものに触れて、頭を錯乱状態にさせて、そこで見た幻覚を、神からのお告げとすることもあります。オカルトには薬物

がともないます。それから、「殺人」は、人を直接的に殺すことはなくても、陰から殺す、すなわち陰口や中傷、陰湿な形で人を追い込むというのは日常茶飯事です。そして、「淫らな行い」は言わずもがな、です。日本の性産業は世界有数であります。そして、「盗み」も自分で働いたものではないものを、もらうだけで生きようとする社会になってきています。

神は、そのように痛めつけられ、傷を受けている者たちが悔い改めることを願っておられます。しかし、彼らは神の善、慈しみ深さに信頼しませんでした。「ローマ 2:4-5 それとも、神のいつくしみ深さがあなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かないつくしみと忍耐と寛容を軽んじているのですか。5 あなたは、頑なで悔い改める心がないために、神の正しいさばきが現れる御怒りの日の怒りを、自分のために蓄えています。」残念ながら、神の憐れみがこれらの患難の中でも現れているのです。三分の一は死にましたが、三分の二は生き残っているのです。そこに、神の恐れ多き姿が現れているのにも関わらず、自分たちの悪い行いを捨てていません。人々に、神の憐れみが示されて、自分を痛めつけているものから離れることができるように祈って行きましょう。